

はじめに

社会学研究科長
貴堂 嘉之

一橋大学の社会学部（1951年創設）は2021年に、大学院社会学研究科（1953年創設）は2023年に、それぞれ創立70周年を迎える。この間、社会学部・社会学研究科は、社会科学・人文科学の幅広い諸分野を横断・総合する教育と研究の拠点として、その歴史を紡いできた。全国の社会科学系大学院として最高水準にある科研費の獲得状況が示すように、社会学部・社会学研究科には、社会学、哲学・思想、歴史学、教育学、政治学、社会人類学、社会心理学などの多様な学問領域で先端的な研究を主導する研究者が集まり、地域研究、総合政策研究、グローバル化研究、ジェンダー研究、平和と和解研究など領域横断的アプローチにもいち早く取り組んできた。

社会学部・社会学研究科のユニークな特徴、それは、個々の学問分野を大切にしながら、同時に教育・研究活動が分野横断的に有機的に連携し、実施されていることにある。社会学部・大学院社会学研究科は、社会科学の研究総合大学としての一橋大学の特長をもっともよく体現する学部・研究科であると、私たちは自負している。一橋大学が2019年に指定国立大学となり、世界最高水準の教育研究拠点としてさらなる発展を期待されるなか、社会学部・社会学研究科は、これまで以上に社会や経済の発展に貢献する成果を発信すべく活動を展開していく。

この『教育研究活動状況報告書』は2002年以来、20年ぶりの刊行となる。自己点検報告書や外部評価書は本来、定期的に作成されるべきだが、2002年10月に『一橋大学大学院社会学研究科・社会学部外部評価報告書』の刊行以来、社会学部・社会学研究科では長らく自己点検や外部評価を怠ってきた。2002年とは、社会学研究科が総合社会科学専攻と地球社会研究専攻の二専攻体制となった時期であり、今般、大学院重点化後の研究科の教育研究活動を総括し、研究科の将来構想のための基礎資料とすることとした次第である。

報告書作成の目的は、社会学部・社会学研究科における教育および研究活動の自己点検を通じ、組織として、その改善に役立てることにある。今後は、他学部・研究科に倣い、定期的に自己点検を実施し、将来の課題を検討する機会としていきたい。社会学部・社会学研究科が卓越した研究教育機関であり続けるためにも、われわれは、研究・教育システムの改善に向けて、たゆまぬ努力を続けていく所存である。